

モーツァルト巡礼ーその 16

K.518 水谷康男

K453a は、葬送行進曲 ニ短調で、1784 年にウィーンで作られたといわれる、ピアノフォルテによる演奏時間 2 分程の小さな行進曲です。

K454 は、ヴァイオリン・ソナタ 第 40 番 変ロ長調「ストリナザッキ・ソナタ」です。1784 年 4 月 21 日にウィーンで作曲され、4 月 29 日に初演しました。イタリア・マントヴァ生まれのヴァイオリニスト:レジーナ・ストリナザッキとモーツァルトが共演するための新作で、ヴァイオリンパートだけは書き上げられましたが、ピアノパートを書く時間がなくスケッチ風なメモだけで本番をこなしたとされています。ウィーンのケルントナートーア劇場で行われた女流ヴァイオリン奏者のレジーナ・ストリナザッキの演奏会で初演されました。この演奏会には皇帝ヨーゼフ2世が臨席し、モーツァルトは自分のクラヴィーアを簡単な草稿を用いて記憶で演奏しましたが、こうしたことはモーツァルトには珍しいことではありませんでした。更に、二人は試演なしに初見で演奏したと伝えられています。実際にこの曲の手稿で、ヴァイオリンパートとピアノパートのインキの色も違っているそうです。本作品はストリナザッキの演奏能力を十分に尊重した上で、従来の「ヴァイオリン伴奏付きのピアノソナタ」から進歩してヴァイオリンがピアノとほぼ互角に渡り合うように配慮された、現在でもしばしば演奏されるヴィオリンソナタの傑作です。



ケルントナー門に隣接するケルントナートーア劇場

K455 は、グルックのジグシュピール「メッカの巡礼」の「愚民は思う」の主題による 10 の変奏曲 ト長調です。原曲となるジグシュピール「愚民は思う」は 1764 年 1 月 7 日にウィーンの宮廷劇場で初演され、翌年には再演、1780 年には演出を変えてシェーンブルンで上演され、1783 年同劇場のグルックが臨席した演奏会で、モーツァルトが、この長老に敬意を表して、この主題で変奏曲を即興したことがあります。演奏時間 13 分程のゆったりとした曲です。

K456 は、ピアノ協奏曲 第 18 番 変ロ長調です。1784 年 9 月 30 日に完成。Fl:1 本、Ob・Fg・Hr 各 2 本、Vn2 部、Va、Vc・Cb よりなる管弦楽で、当時 25 歳になる盲目の女性音楽家バラデイスのために作曲されました。I アレグロ・ヴィヴァーチェ、II アンダンテ・ウン・ポーコ・ソステヌート、III アレグロ・ヴィヴァーチェの 3 楽章よりなり、30 分程の演奏時間を要します。

K457 は、ピアノソナタ 第 14 番 ハ短調 ですが、K475 幻想曲 ハ短調 と一体になって演奏されることも多く、諸説あります。前者は 1784 年 10 月 14 日に作曲され、後者はその 7 か月後の 1785 年 5 月 20 日に作曲されました。しかし、ウィーンのアルタリア社から出版された時、後者の幻想曲を大きな前奏曲とする形で、前者のソナタを一体にして発表されたのです。以来、これらを一体とする考えと、別個のものとする考えが併存して現在に至るというわけです。4 部に分かれた幻想曲(演奏時間 12 分位)と、I アレグロ・モルト、II アダージョ、III アレグロ・アッサイの 3 楽章よりなるソナタ部分(演奏時間 17 分程度)より構成されます。

K458 は、弦楽四重奏曲 第 17 番 変ロ長調「狩」です。1784 年 11 月 9 日に作曲されたもので、『ハイドン・セット』6 曲の第 4 曲にあたり、「狩」というニックネームは、曲の出だしが、狩の角笛を思わせるところから付けられています。軽快な曲風でモーツァルトの弦楽四重奏曲のうちでも特に親しまれている作品で、Ⅰアレグロ・ヴィヴァーチェ・アッサイ、Ⅱメヌエット、Ⅲアダージョ、Ⅳアレグロ・アッサイの 4 楽章よりなる傑作です。

K459 は、ピアノ協奏曲 第 19 番 ヘ長調 で、1784 年 12 月 11 日と草稿に記入があり、1784 年中に作曲された 6 つのピアノ協奏曲の最後の作品です。モーツァルトが作成したカタログには、2 本のトランペットとティンパニも記入されていますが、現存するのは Fl:1 本、Ob・Fg・Hr 各 2 本と Vn2 部、Va、Vc・Cb の弦楽器となっています。これは、五線紙が 12 段だったので、2 本のトランペットとティンパニは、別紙に書いたものと思われ、それが現存しないためと現在の編成になったのです。注文のためではなく、自分の演奏会用に作曲したもので、1790 年フランクフルトにおけるレオポルドⅡの戴冠式におもむいて、K537(後述)の「戴冠式」協奏曲と一緒に演奏しています。そのためか、曲想も華麗で、輝かしい曲となっています。Ⅰ:アレグロ、Ⅱ:アレグレット、Ⅲアレグロ・アッサイの 3 楽章よりなる 30 分近い作品です。

K460 は、サルティの「子羊のように」の主題による 8 つの変奏曲(ピノのための)です。1784 年 6 月にウィーンで作曲されたピアノのための変奏曲で、演奏時間 13 分程の佳曲です。

K461 は、5 つ(6 つ)のメヌエットですが、6 つ目は第 8 小節までしか書かれておらず、この録音でも省かれています。1784 年 1 月頃にウィーンで、作曲されました。いずれもメヌエットが 16 小節、トリオが 16 小節で統一されており、Ob(曲によって Fl)・Fg・Hr 各 2 本と、Vn2 部と Vc・Cb の弦 3 部よりなる編成で演奏される、演奏時間 10 分程の曲です。

K462 は、6 つのコントラダンスで、1784 年 1 月に作曲されました。原作は Vn2 部と低音の弦楽器だけの編成でしたが、再演以来 Ob・Hr 各 2 本を追加して、これが決定版となっています。

第 1 曲 ヘ長調、第 2 曲 変ホ長調、第 3 曲 変ロ長調、第 4 曲 ニ長調、第 5 曲 変ロ長調、第 6 曲 ヘ長調 で、全曲同じ楽器編成ですが、長さや性格はそれぞれ異なっています。

K463 は、二曲のメヌエット(コントラダンス付)で、1784 年 1 月ウィーンで作曲されたものですが、2 曲とも他に同種類のない舞曲です。特にトリオに相当する中間部が早い陽気な踊りなのが特徴です。

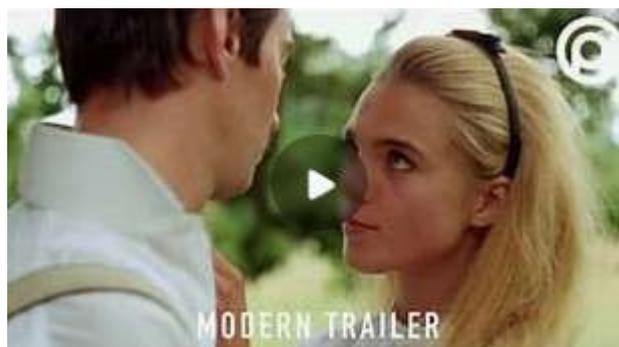
K464 は、弦楽四重奏曲 第 18 番 イ長調 です。1785 年 1 月 10 日に作曲されたもので、『ハイドン・セット』6 曲の第 5 曲にあたり、全 6 曲の中で最大の規模の渋い作品です。Ⅰアレグロ、Ⅱメヌエット、Ⅲアンダンテ、Ⅳアレグロの 4 楽章よりなる演奏時間 35 分程の大曲です。

K465 は、弦楽四重奏曲 第 19 番 ヘ長調 「不協和音」です。1785 年 1 月 14 日ウィーンで作曲された『ハイドン・セット』6 曲の最終曲にあたり、完成の翌日(1 月 15 日)ハイドンを自宅に招待して、ハイドン・セット後半 3 曲を初演し、出版時には全 6 曲を纏めて、ハイドンに捧げました。Ⅰアダージョ〜アレグロ、Ⅱアンダンテ・カンタービレ、Ⅲメヌエット、Ⅳアレグロの 4 楽章よりなる演奏時間 30 分程の「ハイドン・セット」全 6 曲の最後を飾るにふさわしい傑作です。

つづく K466 も、ピアノ協奏曲の傑作です。第 20 番 ニ短調です。1785 年 2 月 10 日に完成し、翌日に予約演奏会で初演されました。ちょうどザルツブルクから着いたばかりの父レオポルドが、娘ナンネル宛に「われらが着いたとき、ヴォルフガングのすぐれた新作のピアノ協奏曲を写譜中であった。お前の弟(ヴォルフガング)は、ロ

ンドを読み返しただけで弾いてみる暇もなかった」と当時の生々しい様子を伝えている。Fl:1 本、Ob・Fg・Hr・Tp 各 2 本とティンパニ、Vn2 部、Va、Vc・Cb の弦楽器の編成となっています。Ⅰアレグロ、Ⅱロマンツェ、Ⅲアレグロ・アッサイの 3 楽章よりなる演奏時間 30 分程の傑作中の大傑作です。

K467 は、ピアノ協奏曲 第 21 番 ハ長調 です。第 20 番(K. 466)の完成から僅か 1 ヶ月後の 1785 年 3 月 9 日に、やはり自分が独奏を担当する 予約演奏会のためにこの曲を完成し、翌日の 3 月 10 日にウィーンのブルグ劇場の演奏会で初演されました。モーツァルトのピアノ協奏曲の中でも人気が高い作品のひとつであり、第 2 楽章が 1967 年のスウェーデン映画『みじかくも美しく燃え』に使われたため、特に海外ではこの映画の原題となった主人公の女性網渡り師の名を採って『エルヴィラ・マディガン』(Elvira Madigan)の愛称で呼ばれることがあります。Fl:1 本、Ob・Fg・Hr・Tp 各 2 本と Vn2 部、Va2 部、Vc・Cb の弦楽器の編成となっています。Ⅰアレグロ、Ⅱアンダンテ、Ⅲアレグロ・ヴィヴァーチェ・アッサイの 3 楽章よりなる、演奏時間 30 分弱の人気曲です。



K468 は、リート「同志の旅」で、フリーメイソンの新しい同志を迎えた時の歓迎の歌として、1785 年 3 月 26 日に作曲された 2 分程の短い歌曲です。

K469 は、オラトリオ「悔い改めたダヴィデ」です。1785 年 3 月にウィーンで開催された音楽家組合の演奏会で上演されたのですが、全 10 曲のうち、第 6 曲と第 8 曲の 2 曲のアリアの他はすべてハ短調ミサ(K427)から転用したものです。演奏時間は 50 分近いものになります。

K470 は、ヴァイオリン協奏曲 イ長調 からの アンダンテ イ長調 ですが、楽譜が紛失されており、本全集にも採用されておりませんので、現状では聴くこともできません。

K471 は、カンタータ「フリーメイソンの喜び」で、1785 年 4 月 20 日作曲、4 月 24 日にウィーンにて初演されました。Ob・Hr 各 2 本、Cl1 本、Vn2 部、Va、Vc・Cb、T 独唱、男声合唱の編成で、フリーメイソン団員相互の親睦と団結向上のために作曲されました。

K472、473、474 は、ヴァイセの詩に曲を付けたリートで、順に「魔法使い」、「満足」、「偽りの世」と題された各 3 分程度のリートです。

K475 は、幻想曲 ハ短調で、前述の K457 ピアノソナタ 第 14 番 ハ短調 の前に置かれてふたつが一体となったソナタとして扱われることが多い、素晴らしい作品です。

K476 は、有名なリート「すみれ」です。1785 年 6 月 8 日に、ウィーンで作曲されました。ゲーテの若い頃の「エルヴィンとエルミーレ」から採られた詩に作曲しています。詩の全文を 4 つの情景とエピローグに分けて曲付けを

した折、演奏時間 2 分半の中に 7 回の転調を行って、5 種類の調性を使いこなして、小さな 1 曲の中で、素晴らしい世界を表現しており、まさにモーツァルトの天才を象徴する作品となっていると思います。

K477 は、フリーメースンの葬送音楽 ハ短調 です。Ob・ヴァルト Hr 各 2 本、Cl・バセット Hr・コントラ Fg 各 1 本、Vn2 部、Va、Vc・Cb という編成で、1785 年 11 月 10 日頃にウィーンで作曲されました。この頃亡くなったフリーメイソンの会員たちを悼んで作曲され、彼らの追悼式の 11 月 17 日に演奏されました。8 分程の短い曲ですが、コントラファゴットを加えた重くて暗い音色が、胸に迫る哀しみを表した感動に満ちた美しい作品となっています。

K478 は、ピアノ四重奏曲 第 1 番 ト短調 で、1785 年 10 月 16 日、ウィーンで作曲されました。I アレグロ: ト短調、II アンダンテ: 変ロ長調、III ロンド: ト長調の 3 楽章よりなる演奏時間 25 分程の深い情熱を秘めた素晴らしい作品です。

K479 は、ソプラノ・テノール・バス 2 による四重唱「せめて何が悪かったを」で、1785 年 11 月 5 日の作で、同年ウィーンで上演されたビアンキの喜歌劇「誘拐された田舎娘」の第 2 幕 第 13 場で歌われたものです。

K480 は、ソプラノ・テノール・バスによる 3 重唱「かわいいマンディーナよ」で、前曲と同様にビアンキの喜歌劇「誘拐された田舎娘」の第 1 幕 第 12 場の挿入曲として歌われたものです。

K481 は、ヴァイオリン・ソナタ 第 41 番 変ホ長調で、1785 年 12 月 12 日にウィーンで完成。I モルト・アレグロ、II アダージョ、III アレグレットの 3 楽章よりなり、第 40 番とは 1 年半以上の間隔がありますが、意欲的な作風で、第 2 楽章の美しさと協奏曲のような風格は、第 40 番と甲乙つけがたい意欲的な作風です。

K482 は、ピアノ協奏曲 第 22 番 変ホ長調です。1785 年 12 月 16 日に作曲され、12 月 23 日に初演されましたが、珍しく第 2 楽章のアンダンテがアンコールされました。常識的な形式をとっていますが、ソロのパートが華やかで、演奏時間も 30 分を超す大作となっています。編成もオーボエに代わってクラリネットに代えています。Cl・Fg・Hr・Tp 各 2 本、Fl 1 本、ティンパニー、Vn 2 部、Va 2 部、Vc・Cb と比較的大規模な編成です。

K483 は、フリーメースンの歌「愛する兄弟よ、今日は声を合わせて」と次の K484 は、1785 年 12 月の作とされています。いずれも、独唱と 3 世の男声合唱、オルガン伴奏で、演奏される短い曲です。

K484 は、フリーメースンの歌「われらの新しい指導者」で、前曲と同じように作られました。

K485 は、ピアノのための ロンド ニ長調です。1786 年 1 月 10 日に作曲されました。構成が単純で、平明に書かれているため、ピアノ学習者に広く親しまれている小品です。

以降、次号に続きます。